

調査の「現場」——山田和人

(大学文学部教授)



私の現在の研究テーマは、江戸時代の人形浄瑠璃の演出研究にあり、とりわけ、当時のからくりの舞台演出を探ろうと試みています。そのために、現存するからくり人形の調査に赴くことが多いわけです。対象は、日本国内だけではなく、海外の人形芝居の場合もあります。昨春は、水上人形を訪ねてベトナムへ、夏には台湾の指人形の劇団小西園の興行と人形のコレクションを見に出かけました。今春三月下旬には、再び、台湾の掌中戲を見るために西螺に赴きます。私にとつて、人形戯は洋の東西を越えた存在です。

人形と接していると、おもしろいことに、人間にツボがあるように、人形にもツボがあることがわかります。そこを的確に刺激すると、たとえ糸が切れていても、あるいは、糸が誤って通されていて、人形は突然、本来の動きを私たちに見せてくれます。その瞬間が、人形調査

の楽しさであり、醍醐味といえるでしょう。ただし、このツボを誤って押すと、人間も大変なことになるように、人形も壊れてしまいます。

その意味で、調査をするものは、人形の取り扱いに慎重でなければならぬのですが、同時に、ある一つの可能性にかけて大胆に調査をしなければ、その人形を、かつての動作も含めた総体として、トータルに把握することはできないのです。ましてや、復元することなどできるはずもありません。

調査をするものは、能うかぎりの文献調査と聞き書きを行う必要があります。そして、得られたデータの的確な分析を、調査の「現場」において実践していかなければなりません。ここでは、いわば、調査者自らが、自分自身の想像力の翼を一杯ひろげて、その人形と向き合う必要があります。その意味で、調査はそれ

自体がアドベンチャーなのです。そうした「現場」に身を置くことのできる幸せはなにもものにもかえがたいものです。自分自身の手に取って、じかに触れてはじめて、人形は何物かを語り始めるのであり、そうした調査のチャンスは必ずしも多くはないのです。

さて、大津祭の調査が一段落し、今年は、また、新たに群馬県桐生市のからくり人形の調査が始まります。

私の研究・教育活動について、以下のホームページもご参照ください。

<http://kokubun.doshisha.ac.jp/kokubun1/staff/kyamada/kyamada.html>

金融的要因とマクロ経済

植田宏文

(大学商学部助教授)



私の研究は、金融機関の貸付け行動・一般投資家の資産選択行動・企業の資金調達行動を代表とする金融的要因がどのような経路を通じてマクロ経済全体の動向に影響を与えるのかを理論・実証分析するとともに、中央銀行による金融政策の有効性について検討することです。

株式・債券・外国為替市場等の金融市場における変化は、決して金融市場の内側だけでの動きとして留まるのではなく、少なからず、あるいは過度に実物経済の実態に作用を及ぼします。金融市場と実物経済の関係は、独立したものでなく深く相互作用を繰り返しながら密接に関連しています。このことは、今世紀初めの米国や一九八五年以後の先進国を中心とする株価のバブル発生と崩壊による実物経済の混乱をみれば疑いもなく確認することができると思われれます。このような意味において、個別的な金融市場

の動きと実物経済の関係を理論的に考察することは古くて今日的な課題でもあります。

具体的には、金融機関の将来に対する主観的期待が過度に変化する場合、貸付け行動の変化を通じて景気循環の幅を一層大きくしてしまうという不安定な要因にもなることを理論的に導出することです。金融の自由化が加速的に進展し、様々な金融市場が競争的になることは、経済全体からみて資金の効率的な配分が促進され経済の成長にプラスの質的側面をもたらしめます。しかし、その反面、運用を間違えれば金融システムそのものを不安定にするだけでなく、経済全体も不安定にするメカニズムを明らかにすることを目的としています。

また、金融機関の貸付け行動、一般投資家の資産選択行動を実証分析することによって、常に現実的側面への展開を図

っていかねければならないと心がけています。さらに中央銀行による金融政策が、どのような条件が成立しているときに最も効果を発揮するのか、またその政策手段としては何が適しているのかを考察することも研究課題です。

現在日本経済は、金融機関の不良債権問題・一連の不祥事に端を発し金融システムそのものの健全性が危ぶまれ、同時に深刻な不況下にあります。このような事態に至った背景、将来への効果的な諸対策を明確にすることが私の最重要課題です。

なぜビタミンCは食品の品質を改良するのか

西村公雄

(女子大学生活科学部助教)

ビタミンCという名前を聞かれて、一体何を想像されるでしょうか。一般的には、美容とか健康を、少し勉強したことのある人ならビタミンCが欠乏すると罹る恐ろしい病気、壊血病を思い起こすのではないのでしょうか。でも、このビタミンCを私の専門(食品加工学)から見ますと品質改良剤として食品に添加される添加物の一種ということになります。特に、パンやかまぼこにこのビタミンCを加えて作ると膨らみや「足」が良くなったりすることが知られています。パン屋さんやかまぼこ屋さんにはなぜビタミンCを加えると品質が良くなるのか分からずに使用しています。でも、食品加工学という学問の視点からこの現象をとらえるとなぜそうなるのか、その品質改良機構を明らかにしなくてはなりません。そこで、ここ七、八年ほどその機構を明らかにするため、研究を続けてきました。最

近、ようやくかまぼこに対するビタミンCの品質改良機構を明らかにすることができました。かまぼこは、魚の筋肉たんぱく質が互いに結合し、網目構造をとっているためにあのような「しこしこ」とした歯触り、舌触りが得られる食品です。そこで、網目構造が密になる(たんぱく質間の結合が増加する)と「足」が強くなることとなります。かまぼこにビタミンCを添加しますとビタミンCはごく微量に存在する金属を介して酸化される際に、酸素ラジカルを発生します。酸素ラジカルは、非常に反応性が高くたんぱく質から電子を引き抜きたんぱく質上にラジカルを発生させます。このたんぱく質上にできたラジカル同志が結合してたんぱく質間で結合ができます。その結果、網目構造がビタミンCを添加しない時よりも密になり、かまぼこの「足」が強くなること分かりました。また、面白い

ことに、この機構は、パンのものとは、全く違うものでした。同じ食品なのにその種類によってビタミンCの働き方が違うことが分かったのです。それでは、別の食品ではどうなのか。それは今、研究中です。そのほかに、野菜中に存在する抗高血圧物質の検索とその加工中の変化や、中高温加熱(100度以下での加熱)時の筋肉たんぱく質の変化が100度加熱の時とどのように違うかなどについても検討中です。こういった加工食品の製造・貯蔵・成分等の幅広い領域を研究対象としている学問が、私の専門である食品加工学です。

「和魂洋才」的思惟構造

山崎 彰

(高等学校教諭)



幕末の激動期、多くの思想家や活動家が、その時代の当面する諸問題に迫ろうとするかぎり、多かれ少なかれ西洋を意識せざるを得なかった。横井小楠・吉田松陰・あるいは坂本龍馬等々、かれらはいずれもなんらかの形で西洋を意識し、それをみずからのものにしようとしたと言えよう。このような「西洋の認識」の一つの現れとして、佐久間象山の「東洋道徳、西洋芸術」的思考がある。このような思考のあり方を「和魂洋才」的思惟構造と表現しよう。

「洋才」の体系的摂取は、杉田玄白らの手になる『解体新書』に始まる。玄白は、それまでの日本の医界の主流を占めてきた後世派の思弁的な医論への批判として成立した古方派の方法に立脚する。すなわち、東洋医学（漢方）本来の経験医学への復古を目指し、『傷寒論』などの古方を実際に使用し、その実効性を実証する

という、いわゆる親試実見主義的方法の影響のもとに、玄白は、『ターフェルアナトミア』を手に解屍実見をし、その正確さに驚き、さっそく翻訳にとりかかる。翻訳事業を通じて、オランダ医学が実証主義と合理主義にもとづくものであると確信し、オランダ流医学の立場にたつものの、実際の治療にあたっては漢方を採用せざるを得ないところから、玄白は「蘭漢折衷」医学を形成し、その理論化を志すことになる。

一方、蘭学者としての立場から世界情勢関係の情報を得る機会も多かった玄白は、ロシアの北辺への接近が深刻化するなかで、対外的危機への対策として軍事力の強化、武士階級の再編強化、封建体制の再編強化への道を進むことになる。

以上のように玄白は、オランダ医学（洋才）の優秀性を認め、その摂取を心がけるとともに、対外策の立場から封建体制

の再編強化への志向（和魂）をもつことになる。こうして玄白は、「和魂洋才」的思惟を形成することになる。

ところで、前述の佐久間象山の「東洋道徳、西洋芸術」的思考と、玄白の思惟構造とは、その内容はもちろんのこと、果たした歴史的な意義も全く異なる。この点をおさえつつ、今後の研究課題としては、明六社に参加した明治初期の思想家についても考察の目を向けてみたいと思っている。

（追記）有坂隆道編『日本洋学史の研究』II・III・IV・VI・X（創元社）、有坂隆道・浅井允晶編『論集日本の洋学』II・III（清文堂）所収の拙稿をご覧いただければ幸いです。